

2013年『吾妻鏡』現代語訳

しずか

静、まづ歌を吟じていはく、

静御前は、まず歌を吟詠して言うには

吉野山みねのしら雪踏み分けて

吉野山の峰の

白雪を踏み分けて

入りにし人の跡ぞこひしき

(山奥に) 入ってしまった愛する人の足跡が恋しい。

また別に曲を歌うて後、和歌を吟ず。その歌に、

また別の歌を謡った後、

和歌を吟詠する。

その歌に、

しづやしづしづのをだまき繰り返し

(義経に) 「静よ、静」と倭文織(しずおり)を織るように繰り返し呼んでもらえた

昔を今になすよしもが

昔を(手繰り寄せて)今に取り戻す方法があればいいのになあ。

かやうに歌ひしかば、社壇も鳴り動くばかりに、

このように歌ったので、

社壇も鳴り動きそつなぐらいつつ、

ア上下いづれも興をもよほしけるところに、二位殿

身分の高い者も低い者も誰もが面白がったところに、

頼朝が

のたまふは、「今、八幡の宝前にて我が芸をいたす

仰るには、

「今、

鶴岡八幡宮の御神前で自分の芸を奉納するにあたり、

に、もつとも関東の万歳を祝ふべきに、人の聞きを

当然、

鎌倉幕府の繁栄を祈らなければならぬ状況なのに、

人が聞いているの

もはばかりらず、反逆の義経を慕ひ、別の曲を歌ふ

も 気にせず、

反逆者である義経を慕い、

(謡うべき歌とは) 違う歌を謡う

事、はなはだもつて奇怪なり」とて、御気色

こと、

非常に

けしからぬ。」

と云つて、

御機嫌を

かはらせ給へば、御台所はきこしめし、

損ないなされたところ、

北条政子はお聞きになり、

「あまりに御怒りをうつさせ給ふな。我が身にいか」
怒りの感情を顔に出し過ぎなさいますな。
私自身に

おいて思ひあたる事あり。君すでに流人とならせ
おいて、思い当たることがある。
あなた様が以前、流人になりなされて、

給ひて、伊豆の国におはしまししころ、われらと御
伊豆の国にいらいしやったころ、
『私めとあなた様の』

ちぎりあさからずといへども、平家繁昌の折ふし
はんじやう
前世からの因縁は浅くない』
ちち といつても、平家が栄華を誇っていた頃

なれば、父北条殿も、さすがに時をおそれ給ひて、
父北条殿（＝北条時政）も、さすがに時流を恐れなされて、

ウひそかにこれを、とどめ給ふ。しかれどもなほ
内密にこれ（＝逢瀬を重ねること）を止めなされる（ことがありました）。そうではあるけれども、やはり、

君に心をかよはして、エくらき夜すがら降る雨をだに
あなた様と心を通わせて、
暗い夜の間中、ずっと降り続く
もすそ ひま 雨さえも

いとはず、かかぐる裳裾も露ばかりの隙より、
気にせず、濡れないように）まくし上げた裳裾も雨露でぐっしより濡れ、ほんの僅かほどの隙間から、

君のおはします御閨のうちにしのび入り候ひしが、
ねや
あなた様のいらっしゃる 御寝室の中に こっそり入りましたが、

その後君は石橋山の戦場におもむかせ給ふ時、
そのあと、 あなた様が石橋山の戦場に 赴きなさい（ついで）る時、

ひとり伊豆の山にのこりゐて、オ御命いかがあらん
（私は）一人で（逢瀬の場だった）伊豆山神社に残っていて、 『あなた様の御命が無事なのだろうか』

ことを思ひくらせば、日になに程か、夜にいく度
たひ
といつことを心配して暮らしていたので、
昼間にはどれほどの時間が、 夜には何度か、

か、たましひを消し候ひし。そのなげきにくらべ
（わからないくらい多く）正気を失いました。 その（頃の私の）嘆きと比べ

候へば、今の静が心もさぞあるらむと思はれ、
まずと、 『今の静御前の気持ちもきくと（私と同じようになつらさが）あるのだろう』と自然と思われ、

いたはしく候ふ。かれもし多年九郎殿に相なれしたねん あひ
気の毒です。彼女（＝静御前）がもし、長年、義経と仲睦まじく過ごした

よしみをわすれ候ふ程ならば、カ貞女の「うしろぎ」に貞淑な女性の愛情として

てあるべからず。今の静が歌の体、外には露ばかり外には少しばかり
ふさわしくありません。今の静御前の歌の体裁は、

の思ひをよせて、内には霧ふかき憤りをふくむ。内には濃霧のような憤りを含む（のを隠している）。

もつとも御あはれみありて、まげて御賞翫候へ」無理を承知で、良さを味わって下さいませ」

と、のたまへば、二位殿きこしめされ、ともに御涙なみだ
と、仰ると、頼朝は（政子の意見を）お聞き入れになって、一緒に御涙

をもよほしたる有様にて、キ御腹立をやめられける。御怒りをやめなされた。

しばらくして、簾中より卯の花がさねの御衣を静にれんちゆう
しばらくして、すだれの中から、卯の花色の襲の御衣を静御前に

こそは下されけれ。
下さった。